

司式・佃 雅之
奏楽：中井喜久子

前奏：「キリエ、永遠にいます父なる神よ」（J.S.バッハ）

招詞：平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。(マタ5:9)

讚美歌 204「よろこびの日よ」

平和聖日礼拝交読文

朗読聖書①イザヤ書 6:1-7

◆イザヤの召命

- 01 ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。
- 02 上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。
- 03 彼らは互いに呼び交わり、唱えた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」
- 04 この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。
- 05 わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た。」
- 06 するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉄で取った炭火があった。
- 07 彼はわたしの口に火を触れさせて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れたので／あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

朗読聖書②ルカによる福音書 8:40-48

◆ヤイロの娘とイエスの服に触れる女

- 40 イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。人々は皆、イエスを待っていたからである。
- 41 そこへ、ヤイロという人が来た。この人は会長長であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願った。
- 42 十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。
- 43 ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。
- 44 この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。
- 45 イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。
- 46 しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。
- 47 女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいよされた次第とを皆の前で話した。
- 48 イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

祈祷

世界の王なる神、あなたの聖名を褒め称えます。私たちは今日も、あなたが与えてくださる祝福を求めて、この礼拝堂へと、またライブ配信へと集められました。この主の日に、あなたが与えてくださる新しさを待ち望み、新しい御言葉と出逢い、新しい驚きと、新しい歓びをあなたが与えてくださると信じます。

主よ、あなたはどのような時にも、恵みと憐れみをもって私たちも見つめてくださる方です。今朝、あなたの教会を祝福してください。私たちがその祝福に応じて、互いに愛し合い、支え合い、喜びをもって、あなたに相應しい教会を造り上げていくことが出来ますように、聖霊が導いてください。私たちが、聖霊に導かれるままに、あなたの福音を宣べ伝える教会として進み行くことが出来ますように、あなたの支えを切にお願い致します。特に、この朝は聖餐の恵みに与ります。共にあなたの霊を飲み、その霊によって心一つとすることが出来ますように。私たちが聖餐の恵みを受けて、キリストに倣って歩んで行くことが出来るようにしてください。

主よ、私たちはあなたから託された業が沢山あることを知りながら、その責任を怠ってきた日々であることを恥じる者であります。どうか不信仰な私たちを赦し、あなたの僕として生きるための必要な備えをお与えください。あなたから戴く恵みを数えて生きることの素晴らしさを、生かされている喜びを、主の食卓に与ることによって鮮明に思い起こし、心からあなたへ感謝する者へと造り変えてください。

平和の神、私たちは今日、あなたの平和を願い、祈りを合わせます。今、御前にあって、戦争による痛みを思い起こします。この月、私たちは敗戦から79年を迎えます。8月6日には広島に、9日には長崎に原爆が落とされ大きな惨禍をもたらしました。大勢の人々が命と尊厳を奪われ、犠牲となりました。私たちの国も、そして私たちが数々の過ちを犯し、御心に反して多くの国々と、また人々に、死と苦しみを与えたことを覚えます。私たちに悔いる心を与えてください。

主なる御神、今もこの地上では人間の過ちが、人間の罪が繰り返されています。一日も早く戦闘が終わりますように。パレスチナの地に、ウクライナの地に、世界の隅々にまで平和をお与えください。この日本にも、東北の被災地で、能登で、山形で、秋田で、災害により困難の中に置き去りにされている方が数多くあります。あなたの御業こそが必要です。主よ、あなたの助けを必要としている人々を顧みてください。あなたの愛を信じて生きることが出来るように導いてください。

この朝、私たち一人ひとりを、平和を実現する者、平和を造る出ず者へと変えてください。

憐れみに富み給う神さま、あなたの深い慈しみを求めて祈ります。今日この礼拝に集うことが出来ない私たちの友が居ります。病と向き合っている友、悩みの中にある友、またこの酷暑によって外出を控えなければならない友をあなたが顧みてくださり、その場に臨んでくださり、あなたの平安を与えてくださいますように。私たちの愛する家族を、あなたのその力強い御手の中に置いてください。

主よ、今日の説教者を感謝致します。鮎川健一牧師を通して、ここに取り次がれる善き知らせが、主にある平和と希望を待ち望んでいる全ての人に届きますように。聴く私たちの心の闇が一掃され、キリストの愛の勝利を信じる事が出来るようにしてください。全てを主に委ねます。

この祈りを私たちの救い主、イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 561「平和を求めて」

8月の新たな月を、主の恵みの内に迎えました。酷暑の日々が続きますが、世界においても早魃、洪水、熱波が猛威を振るい、重ねて世界を揺るがす事件や事故が絶えません。そこで主の恵みに希望をもって証し続けるキリスト教会は、現実の只中であって、主の証し人として伝道に励みます。その中でまた過去の歴史的な過ちを回顧する中で、私たちキリスト信仰者は、祈りの内に何を思うものでしょうか。“平和、平和、主の平和が来ますように”と祈られること多くも、創造主なる神を忘れ、“われ神なり”と言わんばかりに騒ぎの起こる現代でもあります。“主の御国が来ますように”と祈る中、夫々にある信仰が問われています。心からの懺悔と神への真実なる誠実なる応答としての姿勢が、そこでも問われています。すべては正しく御言葉に立っているか否か、主の御心を願い求めているものか否かが問われています。

そこで今朝の場面は、主イエスがゲラサ地方から戻って来た所から始まります。そこには悩み苦しみを抱えた人々が主イエスを待っていました。中には、死にかけている12歳位の一人娘の父ヤイロという会堂長がいました。彼は主の足元にひれ伏し、“自分の家に来てほしい”と願いました。主は彼の家に向かいました。事件はその途中で起こりました。12年間出血が止まらない女性が主に後ろから近づき、主の服の房に触れて出血が止まったのです。旧約聖書時代では律法の書に定めてあるように、“血を流す女は汚れている”として忌み嫌われており、急患の人よりも最優先されること事態、当時の風潮からすれば稀です。主にとっては、急患の病人も、また慢性の病人も差異はありません。私たちに当てはめても、個々の悩み苦しきは、他人と比べて“自分の方が大変だ”、“自分の方がましだ”というのではなく、本人にとっては深刻であり、時に生死の決定打にもなるものです。究極的には、その中で主に祈り願うことしかないものでしょう。

そこで多くの聖書研究者たちが考えるには、“この女性の病気は婦人病の一種とみなし、診療その他で全財産を使い果たした”と分析します。先の律法でみるならば、この女性は12年間、人前に出ることが許されず、人との交わりを断たれていたとなります。“女性は血を流す間は汚れている”と規定にありますから(レビ15)、それにしても社会生活から12年間締め出され、どれ程この女性を苦しめ、また家族を苦しめていたかは容易に理解出来ます。長患いは年齢によらず、本人だけでなく、周囲の人も苦しめます。治療の為に全財産を使い果たしたとなれば、なお家族に対しての思いも、彼女を強く苦しめていたこととなります。彼女は主の噂を聞き、“この方なら治してくださるのでは”と藁をも掴む思いだったことでしょう。そこで必死に後ろから主に近づいて掴んだのが、主の衣の房だったのです。因みに申命記(22:18)には、「身にまとう衣服の四隅には房をつけなければならない」とあります。これは今もユダヤ教の人たちは、衣服のどこかに必ず房をつけているという習慣がありますが、ここが発端です。また日本の神社で務める神官の衣にも房が付いており、大相撲の土俵上の四隅の房もそれぞれ色が定められて懸かっています。それも特別な意味がありますが、ここではこれ以上踏み込みません。牧師の立場を露呈させて、この聖書に記された彼女のことを考えますと、現実には、教会に行かれないが救いを求めている、また教会はどういうところか、キリスト教すらよく知らない人が大勢この世の中には溢れていることを思います。一方では教会の出来事や人の動きが周囲に理解されないか誤解されて広まっていることもあります。教会ってそういう所だと。たと

え教会の敷居は高くないと言っても、よくも悪くも、縁のない所、真面目で立派な人が行くものだと思っているわけです。世界規模で考えれば、現在は様々なメディアを通じて御言葉に触れ、礼拝に与り、献金を送り、様々なキリスト教会のことを知ることも可能になりました。アメリカやヨーロッパ、アジア諸国などでは、かなり以前から既にテレビやラジオ、その他の方法でキリスト教宣教に関する番組や礼拝の時間を持っていることが普通のことです。そうならば教会に来られなくとも、礼拝や献金を怠ることなく信仰生活が可能に、また教会からのお知らせも伝達可能となれば、日本もこのことは大いに学ぶべきところでしょう。その情報手段を使うか否かは人それぞれでしょうけれども、宣教する使命の根幹を問いつつ、更にこの女性の思いを受け止めてみたいと思います。

この時、彼女は“自分から主に触れた”と思っていました。しかし出来事は逆でした。実は主が彼女に触れたのです。触れたつもりが触れられていた。聖書の逆転劇がここにもあります。これは非常に大切です。使徒パウロは書簡の中で「今は神を知っている、いや、むしろ神から知られている」(ガラ4:9)と表現しました。彼は、“自分が神を知っている”と言った途端にそれを打ち消し、“神に自分は知られている”と告白します。信仰なる真実です。多くの場合、自分の信仰が揺れると、“せめてもの”と思うものです。しかし“私たちが主の衣の房に触れたい”と願った時、実は既に“主に触れていただいている、主に捉えられている”ということにあります。そもそもそうでなければ、主イエスとの関係がまったく成り立たないことにもなります。

聖書に戻って、主は自分から力が出て行ったことを感じ取り、「わたしに触れたのはだれか。」と問われました。弟子のペトロは、「群衆が押し合っているのですから、誰が触れたのかわからないでしょう。」と率直に言います。ペトロは何が起きたのか判っていないのですが、一方の主は誰が自分に触れたのか判らなかつたのではなく、後ろを振り向いて見つめ、そして「わたしに触れたのはだれか。」と言われたのでしょう。そうまでされたら当の本人は「隠しきれない」と進み出たに違いありません。それでも疑問が湧きます。それはどうして捜すようなことをされたのかということ。自分から出た力で、一人の人が癒されたと判ったのですから、それで十分ではないか。まして今にも死にそうなるヤイロの一人娘を癒しに行く途中です。時間の余裕などなかったであろうに、主は「わたしに触れたのはだれか。」と問いかけました。主にとっては、病が癒されただけでは十分ではないと思ったからではないでしょうか。

今までも今もこれからも、教会に来ている人の多くは、私もそうですが、生活や人生の具体的な問題を抱え、解決されることを願って教会に来るものと思われまふ。しかし多くの場合は、具体的なその問題が解決されれば、教会にもキリストにも用はないと思う人がいることを、私は多くの場面で見聞きしてきました。またすぐに願いが叶わなければ教会を転々とし、それでも叶わなければ教会から離れることも日常茶飯事です。とすれば別の宗教にという人も多々おります。しかし聖書から教えられることは、そういうことではなく、確かに自分の抱えている問題が解決されることは重要なことですが、それだけでは個々人が心底から新しい生き方に変えられることはありません。主は癒された人に、病気が治るだけではないことを伝え、“本当の救いは、私との関わりが大切である”ことを告げられたことでしょう。47節を見ますと、この女性は、「震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。」とあります。今まで隠されてい

たことが明るみになりました。そこでまたよく言われることには、「どうして洗礼や信仰告白が必要なのか、信じていればそれでいい」と言われる人に対して、この箇所の話が重なります。「自分は祈っている。礼拝に来ている。神は私を守って下さっているということを知っている。だからこそ感謝もしている。それで十分だ。どうして洗礼や信仰告白が必要なのか」と食いつくのです。確かに問題解決されればあなたには十分かもしれない、しかし「主イエスとの関係がきちんと出来ていない」というのが最大の問題です。主は、私たちのその時々の問題を解決するだけではおさめないのです。主が求めておられるのは、自分にして下さったことを公に言い表し、主の祝福を受け、新しく神の子、神の僕として生きることを求めておられるのです。これは前回の場面と根幹は同じです。自分だけが癒され、自分の心にもみ秘める出来事では、主は善しとされなない。それでは自己満足の何ものでもないからです。私たちが信仰を告白し、洗礼を受けることは、私たち一人ひとりと神との関係が自分のみならず、公になることです。主はそのことを求めておられるのです。

主は彼女に対して、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」と言われました。そこでこの女性にどれ程の信仰があったのかとの疑問も起きます。彼女は「主の服の房に触れば、病は癒されるのではないか」と思ったならば、蜘蛛の糸にぶら下がるような、あるかないかの信仰です。しかし主は、そのような「あるかないかの信仰」をも受けとって下さり、「あなたの信仰があなたを救った。」と言って下さっています。何よりも、主に全信頼を献げての求めであること、この真直ぐな信仰に、主は目を留めます。実際、私たちの信仰も、いや私は、決して人に誇れるようなものではない、あるかなきかの信仰であることは断言できます。日本の牧師たち、信徒の人たちに問いかけます。「あなたはどうか」と。主は、彼女のような真直ぐな信仰をきちんと受け取って下さるのです。主を仰ぎ見る信頼に、救われるに十分な信仰として受け止めてくださいます。そして言われます。「安心して行きなさい。」と。「その有るか無きかの信仰を私は受け取った。だから安心して行きなさい」と主は言って下さる。人生は一つの山、困難を克服すれば万事休すといかないものです。「越すに越されぬ田原坂、大井川」と歌われる世間ですけれども、実際そこで引き返すことは出来ず、次から次へと越えねばならない山、川、峠が目の前に迫っている。時に、何でそうも続くものかと思うことも茶飯事です。そこでも主は、彼女が立ち向かわねばならない事柄に対しても、「安心して行きなさい、私が共にいる」と言って下さったのです。まさにインマヌエルなる主の祝福の中で生きる者となる。このことこそ主が彼女に本当に与えたかったものであり、まぎれもなく私たちに与えられる、生きるべくしてある大いなる力、希望です。

今朝のイザヤ書6章には、イザヤの召命が記されています。イザヤは神殿で聖なる神の現臨に触れ、「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者」と告白します。すると、セラフィムのひとりが祭壇から火バサミで取った炭火を持って飛んで来て、それをイザヤの口に持ってきて言いました。「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」と。イザヤはセラヒムを通して聖なる神に触れられ、罪を赦されました。12年間出血が止まらなかった女性の上に起きたことも同じことです。聖なる神の御子、イエス・キリストに触れられて、罪を赦され、そして「安心して行きなさい」という主の祝福を受けました。これこそ主が願ったことです。

私たちは礼拝の度毎に、主から祝福を受けてこの場から派遣されて行き

ます。言葉は違いますけれど、内容はこの時の主の言葉と同じです。「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」と。この祝福を受け取った者として、私たちは夫々の場へと遣わされて行きます。もっと言えば、主の祝福を携えた者として、主の祝福を告げる者として、一人ひとりが遣わされて行きます。今の世の中、そう簡単に、主の恵が何たるものかを受け止め、また宣べ伝えるには、余りにも酷な出来事が多い中にありますが、主と共に時代を過ごした信仰者たちも、私たちと同様に、またそれ以上に過酷な時代を背負っていたでしょう。正しい信仰を受けて、それを伝え続ける事は、いつのときも容易ではありませんけれども、主の平和を求めつつ生きる私たちは、たとえ自らの内にある信仰が、あるかなきかの弱い小さなものであったとしても、主はそれをきちんと受けとめて下さり、祝福をもって応えて下さっているということを心から受け止めたいと思います。そしてなお、感謝のうちに刻みつつ、主の平和の来たる事を願い求めて、この一週間も主の祝福を受けた者として歩んで参りたいと願います。

祈ります。

恵と憐れみに富み給う主イエス・キリストの父なる御神さま、重なる恵みに感謝致します。遡ること、過去の多くの過ちの中で犯してきた罪を懺悔いたします。またその中において、様々な犠牲を強いられ、今もなお心に、また体に傷を負っている方々がおられます。どうか、あなたの大いなる愛の赦しの御手によって心の内に平安が訪れ、真の救いへと導かれますように切に祈ります。

永遠に尽きない平和の神よ、あなたの賜物は平和であり、「あなたの子供たちは平和を造る者と呼ばれる(マタ 5:9?)」、このようにお教えになりました。遠き人々にも、また近き人々にも、平和を宣べ伝えるため、あなたの御子イエス・キリストを私たちのもとへとお送りくださり感謝致します。私たちの心にあなたの平和を注ぎ入れてください。そして私たちが何時もあなたへの思いを絶やすことなく、互いに平和を創り出すことが出来ますように支え導いてください。

全世界で平和を祈り願う諸教会の祈り、御国の来るを願う信仰の友の祈りと共に、尊き主、イエス・キリストの聖名によって御前にお届け致します。アーメン。

讃美歌 394「信仰うけつぎ」

聖晩餐 「使徒信条」の告白・和解の挨拶

讃美歌 81「主の食卓を囲み」

献金・感謝・主の祈り(海野 恵)

ご在天の父なる御神さま、愛と慈しみに富み給う尊い聖名を賛美致します。今朝は8月の第1主日、聖霊降臨節第12主日の礼拝を、平和聖日の礼拝としてお献げすることが許されましたことを心より感謝申し上げます。

酷暑の最中ではありますが、一人ひとりを守られ、主の御堂へとお招きくださり、またライブ配信へとお招きくださいました恵みを心より感謝申し上げます。鮎川牧師より「主に触れて」と題して、主の聖霊を通して豊かなメッセージを賜りました。12年間長血を患っていた女性は、主に触れたのではなく主の方から触れてくださったという深いメッセージを今朝賜りました。またヤイロの娘も癒されました。私たちは主に癒して頂いた喜びを心からの感謝をもって、周りの愛する人たちに宣べ伝えていく者とさせ

てください。

神さま、私たちには多くの罪があります。それはあなた様が全てご存じでいらっしゃいます。一人ひとりの罪が、地域として、国として、自己の利益を追求する罪の極まりとしての戦争を世界に引き起こしていること、それがとどまることを知りません。私たちは先の戦争を思うとき、自分たちが被害者であるという思いを常に持っていますが、それだけではなく、同時に私たちは加害者でもあることをどうぞ覚えさせてください。神さまがお遣わしくださったイエス・キリストの十字架で流された尊い御血潮と裂かれた尊い御体によって私たちは赦され、生きる者とされていることを心から常に覚えて歩むことが出来ますようにお導き下さい。その見える形での聖餐の恵みに今朝与らせて頂きましたことを心から感謝申し上げます。私たち一人ひとりに、そして国々に、世界に主の赦しと癒しがもたらされますように。その日が一日も早いことを切に祈り上げます。平和の使者として私たち一人ひとりを清めて、どうぞお用い下さいますようお願い致します。

私たちは日頃、主より豊かに与えられております。その中の一部を私たちの信仰の証しとして今朝お献げ致しました。どうぞ清めてお用い下さい。

主が地上を歩まれたときに弟子たちに教えられた「主の祈り」をもって、一巡りの歩みを始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌：89「共にいてください」

派遣司式：主は言われます「私は誰を遣わすべきか。」 会衆：私がここにおります。私をお遣わし下さい。司式：「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。>

祝福：主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたが一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告：CS：平和聖日を覚えて作成したクリアファイル販売の案内。牧会委：教友消息確認月間であることのリマンインド、他。

後奏：「我らに平和を与えたまえ」（F.クーブラン）